

小学生バレーボール教室を対象とした形成的授業評価票の実施事例

森祐貴

神戸学院大学

キーワード: 小学生, バレーボール教室, 形成的授業評価票, コーチング

【要約】

バレーボールは、世界的に競技人口も多く老若男女様々な世代が楽しむことのできる人気の高い競技であり、戦前より体育科教育の教材として位置づけられ、数多くの授業研究が行なわれ教材研究や指導法の改善がなされている。

同じバレーボール種目でも、教科体育分野では、対象者の発達段階や熟達度の視点からの研究や初心者指導においての教師の教授方法についての研究が数多く行なわれている。それに対して課外体育分野では、女子小学生チームを対象とした専門的な短期指導の研究やバレーボール教室の形成的評価の活用実施の研究はあるが、教科体育分野と比べて少ないのが現状である。

そこで本研究では、2016年に開催された小学生バレーボール教室の評価の結果と、今回小学生バレーボール教室で行った授業の形成的評価の結果との違いを明らかにし、それを小学生バレーボール教室の実施教材として提供することを目的とした。小学生バレーボール教室の実施プログラムの作成や自身の行なったコーチングを参加者の評価という形でフィードバックを受けて、自己省察するための客観的な資料を得ることに本研究の意義がある。

スポーツパフォーマンス研究, 11, 183-195, 2019年, 受付日: 2018年5月1日, 受理日: 2019年4月2日

責任著者: 森祐貴 650-8586 神戸市中央区港島1-1-3 神戸学院大学

moriyuki.0630@gmail.com

* * * *

Formative evaluation of a volleyball class for elementary school pupils

Yuki Mori

Kobe Gakuin University

Key words: volleyball class, formative evaluation, coaching, elementary school pupils

【Abstract】

Volleyball is a popular sport, enjoyed by men and women of all ages worldwide. Since

before-WWII, it has been an established part of the physical education curriculum in Japan, and many studies have aimed at improvements in teaching and coaching.

In physical education, much research has been done on coaching by teachers from the point of view of its impact on students' growth and maturity. However, the present author could find less published research on volleyball as an extracurricular activity, aside from some investigations of short-term training of elementary school girls and formative evaluation of volleyball class lessons.

The present study examined differences between the results of an evaluation of elementary school volleyball lessons that was conducted in 2016 and a more recent formative evaluation, implemented a volleyball curriculum for elementary school children, and collected feedback from the participants in that curriculum so that an evaluation of the program, including the coaching, could be conducted.

I. 緒言

バレーボールは、1964年の東京大会からオリンピックの正式種目として採用された世界的にも競技人口も多く老若男女様々な世代が楽しむことのできる人気の高い競技である。また、戦前より体育科教育の教材として位置づけられ、現行の学習指導要領ではネット型球技として小学校から高等学校で扱われ実践されている(玉腰, 2017)。そして小学校中高学年でのボール運動系の領域ではネット型としてソフトバレーボールが実施され、「ネットで区切られたコートの中で攻防を組み立て、一定の得点に早く達することを競い合うこと」(文部科学省, 2008)がねらいとされている。上述される体育科教育の現場では、数多くの授業研究が行なわれ教材研究や指導法の改善がなされている。

体育について考える時に、新保ほか(2015)の教科体育と課外体育における違いの明確化に関する研究で示されている部活動(以下、課外体育)と保健体育授業(以下、教科体育)の違いについて理解する必要がある。「課外体育は、生徒自ら好んで参加する活動であるものの、教科体育は、好き嫌いに関わらず必ず参加せねばならないのであり、当然のことながら教科体育への参加意欲は、全体的にみれば低くなるか、あるいは二極化される傾向にあらう」と述べられている(新保ほか, 2015)。異なるモチベーションを持って参加している対象者を理解してそれぞれに合った指導法、アプローチを行なうことが重要であるだろう。

同じバレーボール種目でも、教科体育分野では、対象者の発達段階や熟達度の視点からの研究(津田・後藤, 1996; 長井・後藤, 2003; 玉腰, 2017)やバレーボール教材の初心者指導における教師の教授方法についての高橋ほか(1981)の研究などが行なわれている。それに対して、課外体育分野では、吉田(2013)の女子小学生チームを対象とした専門的な短期指導の研究や森(2017)の課外体育場面での専門家による短期的な指導に教科体育で実践されている授業の形成的評価票を実施した研究はあるが、教科体育のように課外体育場面での事例が少ないのが現状である。

そこで本研究では、2016年に開催された小学生バレーボール教室の評価の結果と、今回小学生バレーボール教室で行った授業の形成的評価の結果との違いを明らかにし、それを小学生バレーボール教室の実施教材として提供することを目的とした。また、このような小学生バレーボール教室を行なう際の実施プログラムの作成や自分自身の行なったコーチングを参加者の評価という形でフィードバックを受けることで自己省察するための客観的な資料を得られることに本研究の意義がある。

II. 方法

1. 調査対象者および調査日程

2016年12月11日(日)と2017年12月3日(日)にK大学主催で地域貢献活動の一環として開催された小学生男女バレーボール大会の2日目のバレーボール教室に参加した小学生193名(男子36名, 女子157名, 平均年齢 10.9 ± 1.2 歳)を対象とした(表1)。本バレーボール教室は、両年ともに事前に行われた小学生男女バレーボール大会の組み合わせ抽選会および大会出場チームの代表者会議にて口頭で大会2日目に小学生男女を対象としたバレーボール教室を開催する旨を伝え、バレーボール教室への参加は参加者の任意で行われた。参加者は兵庫県小学生バレーボール連盟および大阪府小学生バレーボール連盟に加盟しているバレーボール経験者であった。

表 1: 調査対象者の属性および学年

学年(年)	2016 年			2017 年		
	男(人)	女(人)	合計(人)	男(人)	女(人)	合計(人)
6	9	18	27	4	45	49
5	7	26	33	1	26	27
4	5	12	17	3	8	11
3	3	8	11	1	5	6
2	1	5	6	2	2	4
1	0	2	2	0	0	0
合計	25	71	96	11	86	97

2. 調査手続き

調査を行うにあたって、本研究の目的・意義・方法、調査参加は自由意志であることや調査不参加であっても不利益がないこと、調査結果を本研究以外に使用しないことを2016, 2017両年ともに事前に行われた小学生男女バレーボール大会の組み合わせ抽選会および大会出場チームの代表者会議で口頭にて説明した。質問紙は、バレーボール教室参加受付時に、各チームに配布してバレーボール教室終了後に記入させ回収した。未成年を調査対象者とするため、調査に参加する同意書・研究計画を保護者、指導者、チーム責任者に配布し回収した。調査票は無記名とし、連結不可能匿名化でデータの処理を行なった。

3. 実施プログラム

実施プログラムは、筆者と指導補助を務めるK大学男女バレーボール部員25名(男子10名, 女子15名)によって作成され、森(2017)の先行研究で2016年に実施された実施プログラム(表2)から反省を行い改善されたものを使用した(表3)。なお、2016年と2017年ともに筆者がバレーボール教室の講師を務めた。1回限りのバレーボール教室だからこそ、より成果として対象者が実感できるように、2016年実施の反省から競争形式で一方方向のみにパスを出していたオーバーパスを三角形や四角形の隊形を作りボールを受ける方向と出す方向を変えてより実戦に近い形に改善した。また、協力の次元の「9.協力的学習」の数値が高かったのに対して「8.仲良く学習」の数値が低かったのでグループリレーの内容をより参加者同士が触れ合いながら協力して仲良く実施できる電車リレーなどに改善した。

表 2: 2016 年の実施プログラム

経過時間	内容	必要物品	指導者の留意点	学生の動き
10min	集合・挨拶・数確認 ・) 体操	マイク	・しっかり整列できているか ・全体の人数の確認をする	・誘導 ・一緒に参加
10min	ウォーミングアップ ・) ステップ	ホイッスル	・怪我をしないように体を温める	・一緒に参加 ・見本を見せる
5min	アイスブレイク ・) 仲間集めゲーム	音楽デッキ	・小学生と大学生の人数の把握	・物品準備 ・一緒に参加
15min	グループリレー	コーン ボール	・ルールをわかりやすく説明する ・チームでの協力して取り組ませる ・怪我をさせない	・物品準備 ・一緒に参加 ・運営補助
	1) ボールまわし(上)			
	2) ボールまわし(下)			
	3) ボールまわし(上下)			
	4) ボールまわし(左右)			
5) 2人組ボール運び				
5min	給水タイム		・水分補給をしっかりとさせる	
10min	集合・説明(タオルパス)	タオル(不足分)	・わかりやすく説明をする ・出来ていない子のフォロー ・1人あたりのボールに触る回数を増やす	・物品準備 ・運営補助 ・指導補助
	1) タオルパス(オーバーハンドパス)			
	2) タオルパス(オーバーハンドパス:ロング)			
10min	列パス		・1人あたりのボールに触る回数を増やす ・練習の意図をわかりやすく説明する ・出来ていない子のフォロー	・物品準備 ・運営補助 ・指導補助
	1) オーバーハンドパス(ノーマル・直上)			
	2) 連続パス(一列競争)			
15min	オーバーハンドパスゲーム		・ルールをわかりやすく説明する ・楽しく協力して取り組ませる	・指導補助
5min	集合・挨拶		・しっかり整列できているか	
	終了			

表 3: 2017 年の実施プログラム

経過時間	内容	必要物品	指導者の留意点	学生の動き
10min	集合・挨拶・数確認 ・) 体操	マイク	・しっかり整列できているか ・全体の人数の確認をする	・誘導 ・一緒に参加
10min	ウォーミングアップ ・) ボクササイズ	ホイッスル ストップウォッチ	・怪我をしないように体を温める	・一緒に参加 ・見本を見せる
5min	アイスブレイク ・) 仲間集めゲーム	音楽デッキ	・小学生と大学生の人数の把握	・物品準備 ・一緒に参加
15min	グループリレー	コーン ボール	・ルールをわかりやすく説明する ・チームでの協力して取り組ませる ・怪我をさせない	・物品準備 ・一緒に参加 ・運営補助
	1) ボールドリブル			
	2) 電車リレー			
	3) 馬跳び			
4) 馬跳び一股くぐり				
5min	給水タイム		・水分補給をしっかりとさせる	
5min	ウォーミングアップ ・) 犬と猫		・怪我をしないように体を温める	・一緒に参加
10min	集合・説明(タオルパス)	ボール タオル(不足分)	・わかりやすく説明をする ・出来ていない子のフォロー ・1人あたりのボールに触る回数を増やす	・物品準備 ・運営補助 ・指導補助
	1) タオルパス(オーバーハンドパス)			
	2) タオルパス(オーバーハンドパス:ロング)			
10min	列パス		・1人あたりのボールに触る回数を増やす ・練習の意図をわかりやすく説明する ・出来ていない子のフォロー	・物品準備 ・運営補助 ・指導補助
	1) オーバーハンドパス(ノーマル・直上)			
	2) 連続パス(三角・四角)			
15min	オーバーハンドパスゲーム		・ルールをわかりやすく説明する ・楽しく協力して取り組ませる	・指導補助
5min	集合・挨拶		・しっかり整列できているか	
	終了			

4. 調査内容

体育授業評価として体育授業の改善に広く活用されている 9 項目からなる形成的授業評価票(高橋ほか, 1994,1996;長谷川ほか, 1995)を使用した(表 4). 得られた回答は, 各項目, 各次元, 総合的評価の平均点を算出し形成的授業評価票の診断基準(長谷川ほか, 1995)(表 5), 評定基準(表 6)に従い段階評価を行ない森(2017)の 2016 年実施プログラムとの変容を調査した. 本研究では, 小学生バレーボール教室に参加した小学生が対象者のため, 小学校学習指導要領においてネット型のソフトバレーボール種目がボール運動の領域にあることからボール運動を対象とした診断基準を活用して小学生 193 名(男子 36 名, 女子 157 名, 平均年齢 10.9±1.2 歳)に実施した(表 1).

表 4:高橋ほか(1994,1996), 長谷川ほか(1995)の形成的授業評価票

バレーボール教室 についての調査						
キョウ	キョウシツ	シツモン	シタ	オモ	ア	
◎今日のバレーボール教室 について質問します。下の 1~9 について、あなたはどのように思いましたか。当てはまるものに○をつけてください。						
ココロ						
1. ふかく心 にのこることや、かندوقうすることがありましたか。						
(はい どちらでもない いいえ)						
イマ	ウンドウ	サクセン				
2. 今までできなかったこと(運動や作戦)ができるようになりましたか。						
(はい どちらでもない いいえ)						
オモ						
3. 「あっ、わかった！」とか「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。						
(はい どちらでもない いいえ)						
ウンドウ						
4. せいいっぱい、ぜんりよくをつくして運動することができましたか。						
(はい どちらでもない いいえ)						
タノ						
5. 楽しかったですか。						
(はい どちらでもない いいえ)						
ジブン	スス	ガクシュウ				
6. 自分から進んで学習 することができましたか。						
(はい どちらでもない いいえ)						
ジブン	ナンカイ	レンシュウ				
7. 自分のめあてにむかって何回も練習 できましたか。						
(はい どちらでもない いいえ)						
トモ	キョウリョク	ガクシュウ				
8. 友だちと協力 して、なかよく学習 できましたか。						
(はい どちらでもない いいえ)						
トモ	オン	タス				
9. 友だちとおたがいに教えたり、助けたりしましたか。						
(はい どちらでもない いいえ)						

表 5:長谷川ほか(1995)のボール運動を対象とした形成的授業評価票の診断基準

次元	項目/評定	5	4	3	2	1
成果	1. 感動の体験	3.00~2.65	2.64~2.35	2.34~1.99	1.98~1.70	1.69~1.00
	2. 技能の伸び	3.00~2.82	2.81~2.58	2.57~2.30	2.29~2.06	2.05~1.00
	3. 新しい発見	3.00~2.81	2.80~2.56	2.55~2.26	2.25~2.02	2.01~1.00
	次元の評価	3.00~2.69	2.68~2.47	2.46~2.21	2.20~1.99	1.98~1.00
意欲・関心	4. 精一杯の運動	3~2.95	2.94~2.81	2.80~2.65	2.64~2.51	2.50~1.00
	5. 楽しさの体験	3	2.99~2.86	2.85~2.74	2.73~2.63	2.62~1.00
	次元の評価	3~2.94	2.93~2.83	2.82~2.71	2.70~2.60	2.59~1.00
学び方	6. 自主的学習	3.00~2.71	2.70~2.49	2.48~2.23	2.22~2.01	2.00~1.00
	7. めあてをもった学習	3.00~2.68	2.67~2.43	2.42~2.13	2.12~1.89	1.88~1.00
	次元の評価	3.00~2.65	2.64~2.44	2.43~2.20	2.19~1.99	1.98~1.00
協力	8. なかよく学習	3.00~2.87	2.86~2.70	2.69~2.50	2.49~2.33	2.32~1.00
	9. 協力的学習	3.00~2.72	2.71~2.50	2.49~2.24	2.23~2.02	2.01~1.00
	次元の評価	3.00~2.77	2.76~2.59	2.58~2.37	2.36~2.20	2.19~1.00
	総合評価(総平均)	3.00~2.78	2.77~2.59	2.58~2.37	2.36~2.18	2.17~1.00

表 6:長谷川ほか(1995)の形成的授業評価票の評定基準

評定	評価
5	特に優れた授業
4	良い授業
3	普通の授業
2	普通より劣る授業
1	特に劣る授業

1).形成的授業評価票および診断基準

体育授業評価として体育授業の改善に広く活用されている形成的授業評価票とは、体育授業の中で授業を受けた学習者である児童生徒の立場から「成果」、「意欲・関心」、「学び方」、「協力」の4次元を評価できる評価票である。①「成果」(感動の体験、技能の伸び、新しい発見)、②「意欲・関心」(精一杯の運動、楽しさの経験)、③「学び方」(自主的学習、めあてをもった学習)、④「協力」(なかよく学習、協力的学習)が4次元の項目の詳細となっている。質問項目の評価は、「はい」3点、「どちらでもない」2点、「いいえ」1点の3段階で評定される。

指導者が自身の行なった授業の成否を判断し指導改善を行なうための基準として形成的授業評価票の診断基準が用いられている。診断基準には、全運動種目・全学年を対象としたものと運動種目別(器械運動・陸上運動・ボール運動)を対象としたものがある(長谷川ほか, 1995)。評定は、「評定3を子どもの目から見て普通の授業、評定4以上をよい授業。評定5は特に優れた授業として。一方、評定2以下を普通より劣る授業、評定1はとくに劣る授業としてとらえることができる」とされている(長谷川ほか, 1995)。

5.分析方法

各質問項目に対する回答を形成的授業評価票の診断基準に従い得点化して、各次元、各項目の得点の平均値と標準偏差を算出した。そして、森(2017)の先行研究で実施された2016年と2017年開催のバレーボール教室で形成的授業評価を実施して得られた評価結果によって評価の変容について明らか

にするために、2016年と2017年の評価結果に対応のないt検定を実施し、次元、項目、総合評価ごとに比較した。なお、統計処理にはIBM SPSS Statistics 20を使用した。その際、有意水準は5%未満とした。

III. 結果および考察

1. 2016年と2017年のボール運動を対象とした形成的授業評価得点・評定

無記名・順序尺度3件法のアンケート調査を行い、193名から回答が得られた。質問項目の回答に記入不備が見られた2名を除外し、191名について分析を行った。

2016年は、先行研究で実施された森(2017)のデータを引用した。2017年は、「成果」の次元(2.63)は、次元全体の評定は4、①感動の体験(2.59)評定4、②技能の伸び(2.58)評定4、③新しい発見(2.73)評定4であった。「意欲・関心」の次元(2.92)は、次元全体の評定は4、④精一杯の運動(2.86)評定4、⑤楽しさの体験(2.99)であった。「学び方」の次元(2.59)は、次元全体の評定は4、⑥自主的学習(2.6)評定4、⑦めあてをもった学習(2.58)評定4であった。「協力」の次元(2.87)は、次元全体の評定は5、⑧なかよく学習(2.8)評定4、⑨協力的学習(2.94)評定5であった。総合評価の総平均は2.74、評定4であった(表7)。そして、森(2017)の2016年開催のバレーボール教室と2017年開催のバレーボール教室の参加者が回答した形成的授業評価結果を比較した。その結果、協力の次元($p=0.019 < .05$)となかよく学習($p=0.042 < .05$)の2つの項目において有意な差異が認められた(表7)。その他の項目に関しては、有意な差異は認められなかった(表7)。

表7: 形成的授業評価得点の比較

因子名・次元	2016年 (N=96)			2017年 (N=97)			t 値
	M	SD	評定	M	SD	評定	
【成果】	2.57	0.48	4	2.63	0.43	4	0.68
感動の体験	2.49	0.7	4	2.59	0.61	4	0.46
技能の伸び	2.56	0.58	3	2.58	0.55	4	0.10
新しい発見	2.63	0.65	4	2.73	0.55	4	0.77
【意欲・関心】	2.9	0.25	4	2.92	0.2	4	0.93
精一杯の運動	2.83	0.46	4	2.86	0.38	4	0.65
楽しさの体験	2.99	0.18	4	2.99	0.1	4	1.05
【学び方】	2.59	0.51	4	2.59	0.42	4	0.07
自主的学習	2.68	0.54	4	2.6	0.59	4	0.76
めあてをもった学習	2.57	0.65	4	2.58	0.5	4	0.65
【協力】	2.73	0.48	4	2.87	0.27	5	2.36*
なかよく学習	2.66	0.66	3	2.8	0.45	4	2.05*
協力的学習	2.93	0.45	5	2.94	0.24	5	1.26
総合評価	2.68	0.58	4	2.74	0.49	4	1.68

* $p < .05$

2. 学年割合に着目した形成的授業評価結果の変容

学年割合が評価結果に影響を与えると考えられるために、5、6年生の高学年群と3、4年生の中学年群に分けての形成的授業評価評定の変容を表8、9に示した。その結果、高学年群の比較では、成果の

次元($p=.003 < .05$), 感動の体験 ($p=.031 < .05$), 協力の次元($p=.001 < .05$), なかよく学習($p=.006 < .05$), 総合評価 ($p=.0002 < .05$)の 5 つの項目において有意な差異が認められた(表 8). 中学年群の比較では, 有意な差異は認められなかった(表 9). 2016 年では参加者の高学年の割合が 63%に対して, 78%と全体の約 80%を占めており 2017 年実施のバレーボール教室の形成的授業評価の評価結果の中でも成果の次元の「感動の体験」, 「技能の伸び」, 「新しい発見」の平均値が 2016 年度よりも高い数値を示した. 小学生の運動意識において, 運動自己肯定感は学年が上がるにつれて下降する傾向にある(山下ほか, 2016)とされ, 参加者の高学年の割合が高い中で, 運動自己肯定感に関する成果の次元の 3 項目で高い数値を示したことは価値あるものだろう. そして女子は男子と比べて, 運動が上手になりたいと思う運動願望が高いとされ, 成果の部分で高い評価をしたのではないかと考えられる. また, 2016 年と 2017 年の比較において低値を中学年の成果の次元と中でも「感動の体験」が示した. その要因として, 山下ほか(2016)の子どもの運動意識への影響を男女差と学年差に着目した研究の中で「4 年生は運動への熱意が強く, 集団意識を持ち, 運動自己肯定感や運動願望が高かった」と述べられているように, 1 回限りのバレーボール教室のような短期的な指導での新しい技術の習得, 発見などの部分でもの足りなさを感じてしまったと推察される. 両年を比較して, 成果の次元の「2.技能の伸び」の評価結果や協力の次元評価と「8.なかよく学習」が高い数値を示した要因として, 2016 年開催のバレーボール教室の反省から, 競争形式でのオーバーパスから一方方向だけでなく, 三角形や四角形の隊形からボールを受ける方向と出す方向を実戦に近い形に変えたことが「2.技能の伸び」に繋がったと推察できる. 「8.なかよく学習」に関しても, グループリレーの内容を個人でのドリブルリレーから電車リレーや馬跳びなどのスキンシップを取りながらできるものに変更したことも要因だろう. また両年ともに学年に関係なく, 意欲・関心の次元において特に高い数値を示していたのは, 新保ほか(2015)によって述べられている課外体育は, 強制でなく任意での参加であり自ら好んで参加する活動のために参加者自身がやる気と学ぶことに対する高いモチベーションを持って参加しているという意見を示唆する結果となった. また, 高学年と中学年を比較することで 2016 年よりも 2017 年で高い数値を示した部分が明確になった(表 8, 9, 図 1, 2). 自己省察という観点では, 2016 年開催のバレーボール教室で実施された形成的授業評価結果で数値の低かった部分を主観的には明確に感じる事が出来なかったが, 定量化されたデータを見ることによってプログラム改善に大いに役立った. 長谷川ほか(1995)の研究においては, 教師の自己省察の資料として使用する際に, 対象集団が複数あるため評定という絶対的評価を得るために評定を用いられていると推察できるが, 年度によっての平均値が高低の違いが出ていることから評定はもちろんであるが, 形成的授業評価結果の平均値に着目することも必要になってくるだろう.

表 8: 形成的授業評価平均値(高学年比較)

因子名・次元	2016年 (n=59)	2017年 (n=76)	t 値
【成果】	2.49	2.66	3.06*
感動の体験	2.37	2.62	2.18*
技能の伸び	2.49	2.61	1.24
新しい発見	2.59	2.76	1.78
【意欲・関心】	2.87	2.94	1.45
精一杯の運動	2.8	2.89	1.09
楽しさの体験	2.95	2.99	1.19
【学び方】	2.59	2.59	0.18
自主的学習	2.66	2.59	0.54
めあてをもった学習	2.53	2.59	0.76
【協力】	2.74	2.91	3.30*
なかよく学習	2.63	2.88	2.77*
協力的学習	2.85	2.95	1.80
総合評価	2.65	2.76	3.88*

* $p < .05$

表 9: 形成的授業評価平均値(中学年比較)

因子名・次元	2016年 (n=28)	2017年 (n=17)	t 値
【成果】	2.7	2.49	1.84
感動の体験	2.79	2.47	1.62
技能の伸び	2.64	2.47	0.81
新しい発見	2.68	2.53	0.68
【意欲・関心】	2.93	2.88	0.62
精一杯の運動	2.86	2.76	0.63
楽しさの体験	3	3	0
【学び方】	2.52	2.53	0
自主的学習	2.57	2.59	0.04
めあてをもった学習	2.46	2.47	0.04
【協力】	2.7	2.68	0.34
なかよく学習	2.54	2.47	0.51
協力的学習	2.86	2.88	0.17
総合評価	2.71	2.63	1.53

* $p < .05$

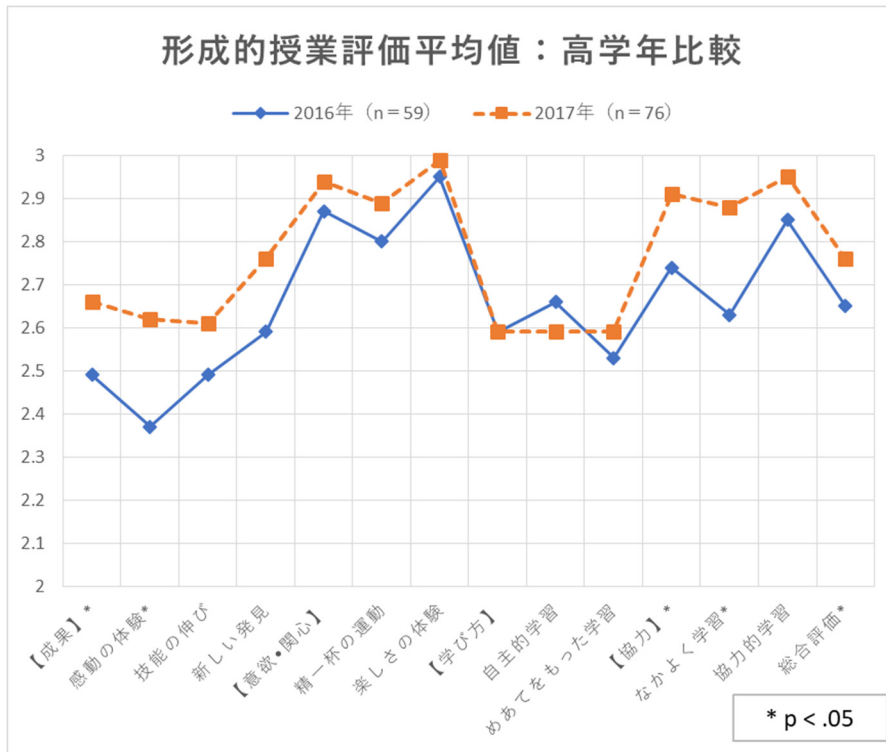


図 1: 形成的授業評価平均値(高学年比較)

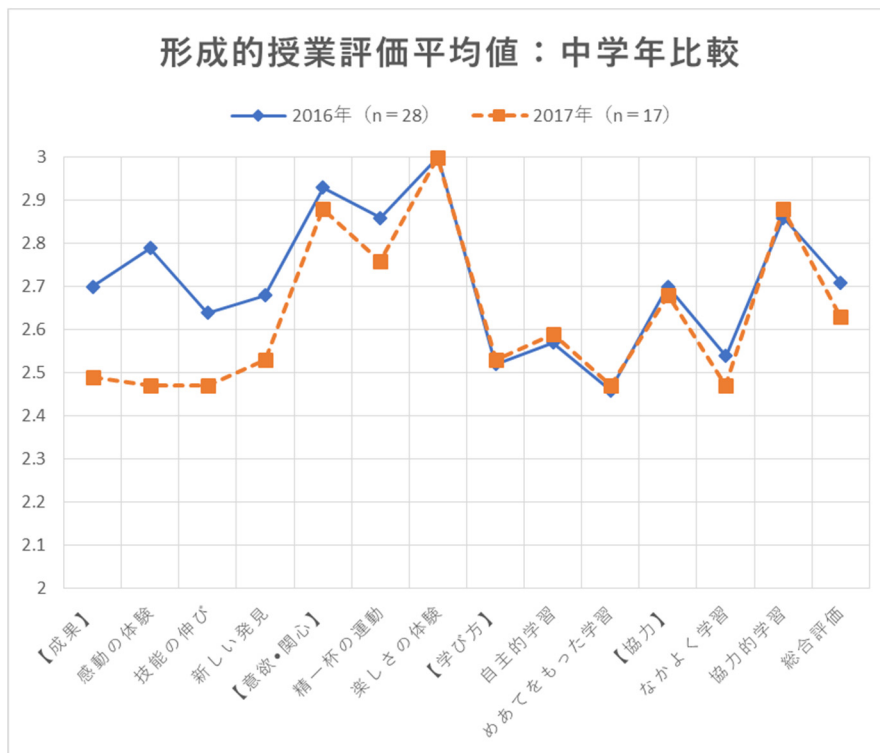


図 2: 形成的授業評価平均値(中学年比較)

IV.まとめと今後の課題

今回のバレーボール教室では、2016年では、参加者96名に対して男子24名、2017年では、97名に対して男子11名というように年を追う毎に男子チームの参加、所属人数が減ってきている。そのため、本研究の調査対象者の7割以上が女子であるが、「身体的有能さの認知」、「統制感」において性差による違いがあることが岡沢ほか(1996)の研究で明らかにされている。本研究において参加者の性別、学年比率に偏りがあったが、教科体育場面で活用されている形成的授業評価は、体育授業でありほぼ同数の男女に対して実施されている。今後の課題として、山下ほか(2016)の研究で男女差や学年差によって子どもの運動意識が異なることが明らかにされており、同じバレーボール教室でも学年差や男女差に焦点を当てて実施して事例を増やしていくことが必要だろう。

また、本研究の対象者はバレーボール経験者ではあるが、競技歴は短くほぼ初心者への技術指導の事例であった。初心者への指導によるパフォーマンス向上は教科体育分野での授業研究(高橋ほか, 1982, 津田・後藤, 1996)はあるが、「初心者への技術指導は難しい」という固定概念や先入観があるためか、課外体育分野での事例は数少ない(吉田, 2013)。課外体育分野での事例として行った本研究では、形成的授業評価票の小学生バレーボール教室での活用の際に、体育授業よりも多くの子どもを対象としている部分や90分という長い時間を行う上で、1人1人の表情や技能の習得具合を確認することが出来ず、主観的な反省になってしまう部分が多いが、定量化された数値の評価を見ることによって客観的にプログラム内容や設定時間についての反省ができ、改善のための良い資料となった。実際に活用する上で、バレーボール教室という形態では、対象年齢などの制限を行わない限り幅広い年齢層を対象にすることがあり、対象年齢に関わらずに参加できるメニューや年齢別に分けてグルーピングすることも考慮すべきだろう。今後、本研究のような1回限りのバレーボール教室の実施事例や、初心者または技術的に未熟な対象者への技術指導事例が多くなることで、先述された初心者への技術指導は難しいという先入観が払拭され、課外体育の指導現場において役立つ有用な事例を提供できるだろう。

文献

- ・長谷川悦示, 高橋健夫, 浦井孝夫, 松本富子(1995)小学校体育授業の形成的授業評価票及び診断基準作成の試み. スポーツ教育学研究, 14(2): 37-51.
- ・文部科学省(2008)小学校学習指導要領解説体育編
- ・森祐貴(2017)小学生バレーボール教室を対象とした形成的授業評価の活用に向けての検討. 身体運動文化研究 23:31-38.
- ・長井功, 後藤幸弘(2003)小学6年と中学1年から学習した生徒の縦断的成果の比較からみたバレーボール学習開始の適時期. 大坂体育学研究, 41:7-17.
- ・岡沢祥訓, 北真佐美, 諏訪祐一郎(1996)運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究, 16(2):145-155.
- ・新保淳, 野津一浩(2015)教科体育と課外体育における違いの明確化とそれぞれの意義に関する研究. 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 24: 61-68.
- ・玉腰和典(2017)体育科教育におけるバレーボールの教材研究史(1)-学校体育研究同志会における生活体育時代の動向に着目して-. 日本福祉大学子ども発達学論集, 9: 31-46.

- ・高橋健夫, 広瀬裕司, 米田博行, 増田辰夫, 上野佳男(1981)バレーボール教材の初心者指導の方法に関する比較研究-中学1年男子生徒を対象にして-. 奈良教育大学紀要, 30 (1):93-112.
- ・高橋健夫, 広瀬裕司, 米田博行, 増田辰夫, 上野佳男(1982)バレーボール教材の初心者指導の方法に関する比較研究(Ⅱ). 奈良教育大学紀要, 31 (1):85-106.
- ・高橋健夫, 長谷川悦示, 刈谷三郎(1994)体育授業の「形成的評価法」作成の試み:子供の授業評価の構造に着目して. 体育学研究, 39:29-37.
- ・高橋健夫, 長谷川悦示, 日野克博, 浦井孝夫(1996)体育授業観察チェックリスト作成の試み:観察者の評価観点の構造を手がかりに. 体育学研究, 41:181-191.
- ・津田和也, 後藤幸弘(1996)バレーボール教材の学習指導に関する研究-中学生女子初心者を対象とした守備中心と攻撃中心の学習過程の比較-. 日本教科教育学会誌 19(1): 13-21.
- ・山下玲香, 都築繁幸, 石川恭(2016)子どもの運動意識とそれに及ぼす男女差及び学年差の影響. 発達発育研究, 71 : 1-8.
- ・吉田康成(2013)小学生への球技指導-6年生初心者を対象とした短期的指導事例-. プール学院大学研究紀要, 54 : 203-218.